
歪

沙雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歪

【Nコード】

N3497C

【作者名】

沙雨

【あらすじ】

犯罪を犯す感情が除去できるようになり、安全な人間ばかりがはびこる平和な世界。けれどある日を境に、いきなり世界が反転してしまう。

FILE 0：プロローグ（藤池美歌）（前書き）

趣味丸出しに行き当たりばったりで書いています・ダークファンタジーっぽく出来たらいいなと思っています。下手くそな文章ですが、読んで頂けたら幸いです。

FILE 0：プロローグ（藤池美歌）

真珠だろうか…？

…いや、違う。

その妄想は白くなどなく、歪んだ真珠よりもっと多大で凶悪な夢を見ていた。

私は目を凝らし、その果てしなく不気味な球体を観察する。

それは懐古と少しの恐怖の表情をないまぜにして映し、ふわふわと宙に浮いては消えていく。

（…シャボン玉だ）

明るいうグリーンの光沢を放つその丸い円は、晴れ渡った真つ青な空には不自然なくらいに似合わない。

脆く儚い泡玉は、緑色の毒々しい液体を湛え、空に辿り着く事なく、片端から破れて死んでいく。

そこから滴り落ちる緑の血液は、地面にしみ込んで床に悲鳴を上げさせている。

（生まれて死んで生まれて死んで）

その細い筒の先端をくわえ、気怠そうに息を吹いているのは、痩せっぽっちで背の高い、薄茶色の髪 of 男だ。

白い丸襟にフリル飾りのついた半袖のシャツ（男子が着るには少々可愛らし過ぎる）と、深い紺色の地味なスラックスは、どこからどう見ても聖ペルレ学園の生徒に与えられる衣服そのもので、それはこの傷んだ榎茸のような男が、この学園の生徒である事を示していた。

（死んで生まれてまた死んだ）

季節は夏に差し掛かった6月の下旬。

ブラウン管の中のニュースキャスターが、実に善良な口調で、

「今年は近年稀に見る猛暑に見舞われそうです」だとか、

「熱中症にお気をつけ下さい」だとかのお決まりの台詞を延べる時

期だ。

陽に焼けた健康的な褐色肌の生徒がちらほらと少しずつ現れ始め、一部の女子生徒がその周りで惚れた腫れたを展開する疎ましい夏。しかし、それでもその男の肌は水に浸けてある豆腐のように生っ白く、皮膚の下をぐんにやりと這う青緑色の血管が透けて見えるようだ。

真昼の夏の陽炎の所為で、果てしなく長く見える脚を悠々と伸ばし、この焼け爛れそうな暑さの中、涼しい顔をしてシャボンを吹き続けている。

一方で私はひたすらこめかみを指で摘んで、具合が悪そうに俯いていた。

（生まれた瞬間また死を…… ああ、頭が痛い）

私の持病と言っても良いくらいの偏頭痛には、頭痛薬などさっぱり効かない。

その痛みは寄生虫のように私の頭蓋骨の下で毎日のように暴れ狂う。時に見えない何かが、私という概念を侵食しているのではないかと思う程に。

それにしても同じクラスだったはずなのに、この男の名前がここ数日思い出せない。

思い出そうとすればする程に酷い吐き気を伴う頭痛に襲われ、どうにも上手い具合に記憶が検索できなくなる。

だから私は、思い出す事をついさつき諦めたばかりだ。

それに、名前は殆んどこの痛みとは関係ないように思える。

確かそれよりも数倍は重要な事があった筈で、私は優先的にそれ思い出す事を考えなくてはならなかった。

そう……迅速、かつ早急に。

そうでなくとも、私の頭は不自然な隠蔽と工作に満たされてしまっているのだから。

『この男は、どこかがおかしい』

それをやっとの事で思い出したのもつい最近だ。

（さあ、いい加減にして口に出すんだ）

私は暑さと頭痛で朦朧とした脳を戒めるように唇を噛んだ。

一言で良い。

とても重要な疑問を声にして尋ねる事が出来れば…。

「…あなたはどのようにしてシャボン玉を飛ばすの？」私は平静を装い、男に向かって静かにそう問い掛けた。

その間も頭痛は私を罰するように痛みを加速させ、額からはじつとりと脂汗が垂れたが、私は心を落ち着ける事により一層努めた。

（ああ…そうだ…）

私は確か、それが聞きたかった。

だから昼休みの鐘が鳴ると同時に友人のしつこい誘いをかわし、この男の後をつけ、屋上にたどりついたんだ。

相変わらず頭が痛んだが、この痛みはきつと私がこの男を知る事を本能的に拒否しているせいなのだろう。

けれど私は訊ねる。

どうして屋上で、ひとりで座ってそんなことをしているのか？

ふと、それを聞くためだけに、私はこれまで生きて来たような気がした。（知ってはいけない知ってはいけない知ってはいけない知ってはい…）

これは確かとても重要な事で、今すぐにでも知らなければならぬ事だった筈なのだ。

けれど、男はあまりその事の重要さを理解していない様子だった。

「そのシャボン玉は、何？」

私は二回目の問い掛けをした。

今度ばかりは苦痛が面に出てしまう。

何しろ脳が私に逆らうものだから、その痛みは尋常じゃあない。

男は二回目の問い掛けに、やっとの事で首をぐるりとこちら側に回すと、細い指でストローをくるくると遊ばせながら、ぼうつとした目で私を見つめてきた。

（知ってはいけない知ってはいけない知ってはいけない知ってはい

けない知ってはいけない)

私は妙な気分に取り憑かれる。

その瞳は光を宿さず、深い闇の安らぎに満ちている。
闇。

(この世界には縁の無いもの)

男は不思議そうに首を傾げ、困ったように微笑む。

出来れば教えたくはないので、穏便に済ませたいという風に見えたが、次に私が口を開きかけたときに、男はあっさりと質問に答えた。
「シャボン玉はね、器なんですよ」

それはあまり抑揚がなく、いかにも穏やかな印象の声で、私は少し安心する。

男はやはり少年であって、それ以外の代物であろうはずがないのだ。その場の空気は満たされていたし、安定して、赤く、暖かった。それと同時に頭痛が遠ざかっていく。

(心配な事なんて、なにひとつない)

私はせいぜい顔に出来た二キビだとか、下らない数式がなかなか頭に入らない事だとかに気を回してさえいれば良い。

(赤は安心する…赤ければ痛くなくなる……)
けれど、考えるとすぐにまた解らなくなった。

…男？

一瞬の眩暈に似た、この不吉な感覚。
目の前のこいつは、男だっただろうか？

こいつは少年で、その右の手に包まれているあの硝子容器の中身は、ただのシャボン液？

…違う。

そうじゃない。

目の前のこいつは、男でもなければ、少年でもない。
まして手のひらの中の硝子容器の中身が、無害なシャボン液な筈がない。

「シャボン玉はね、器なんですよ」

…目の前の性別不詳が、先程と全く同じ声で、全く同じ事を言った。そこには赤くて暖かい空気が充滿していた。ふと、違和感がせり上がってくる。

『赤い…赤？』

（違う！）

（違う、違う！！）

再び例の頭痛がやって来た。

私を蝕む頭痛が。

私は、そこで初めて恐怖を覚える。

意味が解った。

私には意味が解ってしまった。

こいつは、ひどい事をしでかそうとしている。

だから早く、早く逃げなければならぬ！

焦りだけが、私の鈍った脳内を駆け巡っていく。

私の背中が、ぷつぷつと一斉に汗を吹いた。

「あなたは、あるとき……」

言葉が口の中で纏れた糸のように絡まって、上手く出てこない。

ひどい胸騒ぎに耐え、私はよろけながらそいつから離れようと藻掻く。

けれど、私の足はその場に根が張ってしまったかのように、動くことはしなかった。

「僕の名前は高町紘だよ」

視界が赤い。

そいつが言葉を発すると同時に、私の中に赤い癒しが入り込む。

このまま奈落の底へ落ちたなら、私は安らかに眠れるだろうか？

私はその時、憎しみが欲しいと思った。

憎しみを掴み取った時に初めて、私は癒されるのだ。

それしか、方法が無かった。

選択肢なんてひとつも無かった。

FILE 1：異変（新堂博信）

『天使症候群の発症』

約百五十年前に空から舞い落ちた奇妙な物体を利用する事によって、人類は犯罪者を激減させる事に成功した。

その物体はつるりとした球体の姿を模し、それに触れた者は世界に対する負の感情を亡きものにする事ができた。

事実、それを最初に見つけ隠し持っていた囚人は、それに触れた瞬間から人が変わったように真面目で勤勉な人間となった。

それからその囚人を經由して、それは様々な凶悪犯の手に渡り、これらの人格の破綻を一瞬で矯正してしまった。

刑期を終え社会復帰を果たした囚人達は、二度と犯罪に手を染める事は無く、死刑宣告を受けた囚人達は、暴れる事も泣き叫ぶ事も無く、その最期の時まで不気味な程に静かに聞き分け良く過ごした。

私達はこの現象を『天使症候群』と呼んだ。

その白い球体に触れる事によって感染する、殆んど不治と言っても良い病の一種だ。

やがて人類はその球体を神の真珠と呼称するようになり、生きとし生ける全ての人間はその球体に触れる事を義務付けられるようになった。

『異変（新堂博信）』

そいつは無口だ。

青白い不健康そうな顔をしておいて、いつも人の心臓をつけ狙ってい

る。

円らな瞳に小さな口は、草食動物のような大人しさをそいつに与えており、一見とても可憐だが、目の下ある刺青のような濃い隈に、何かに餓えて常に食い物を探し求めるハイエナのような八重歯が、その全てを台無しにしまっている。

目の下にある小さな泣きボクロは、そいつの陰気そうな面持ちをより強調させ、緩やかなカーブを描く猫背は、どこことなく投げ遣りで愚鈍な印象を見せる。

おまけにそいつはまるで鬱病患者のように覇気が無く、常に無機質な機械音声のような声色を持つ。

時たまその幾重にも重ねられた金属片のスクラップのような声帯が故障するのか、誰が話しかけようが頑として口を開かない時もある。しかし、そういう時、クラスメイトは決まってそいつを放っておく。放っておきさえすれば、そいつは無害だからだ。

そいつのする事といえはいつもただひたすらに爪を齧る事位なもので、ふと何かを思い出したように独り言を無限に繰り返し始めない限りは、至って無害。

そう、無害な筈なのだ。そいつはどこにでもいるような、人よりちよつとばかり容姿が劣っていて、陰気なだけのただの女子校生だ。

世が世ならば真つ先に魔女に認定され、火炙りに処されてしまいそうなの。その奇抜な容姿も、人権という生温い慈悲と、神の真珠に触れる事による迫害や加虐行為の除去の恩恵により、助かっている訳だ。

最も、法律なんてものより後者の方が断然役に立っているのは火を見るよりも明らかだが…。

そう、今まで数多の宗教があったものの、直接的に神の救済を受けられる訳では無かった（狂信者はどうだか知らんが）。

しかし、あれは違う。

あれが有る事によって、俺達はどうして犯罪とは無縁の世界で安楽に暮らしていられる。

正にあれは『神』の真珠と呼ぶに相応しい代物だろう。
ただ…極稀に真珠の影響を正しく受けられずに墮落してしまう者も居るという噂が有るのも事実なのだが…。

(……まだしつこく残ってやがる……)

俺は憎々しげに注射針の跡の残る自分の腕を見つめ、廊下の中心で大きく深呼吸をした。

思考を切り替える為だ。

「…なあ、おい」

目の前に居るそいつに呼び掛けるのは、少しばかり勇気が要る行為だった。

確かにさっきも述べた通り、そいつは至って無害な生き物だ。

しかし、俺は情けない事にそいつに怯えていた。

あの、いつも用件だけを伝えたらとつと自室に引っ込んでしまう校長にすら心配される程だ。

余程俺はみじめな顔をしていたのだろう。

……とにかく、嫌なのだ。

俺はこの辛気臭い女の傍に居るのがたまらなく嫌なのだ。

この女は夜になると悪魔に豹変し、己の飢えを満たすために這いずり廻りながら獲物を探す。

真夜中の校舎でだ。

そして、格好の餌食を見つける。

宿直の教師。

部活動の長引いたスポーツクラブの生徒。

懐中電灯を持ったやる気のない警備員。

あるいは、下らないお喋りに時間を費やしてしまった、そんなだらしのない奴か……。

とにかく、あの女はその獲物をいとも簡単に引き千切る。

あの細い華奢な腕で。

あの齧り切られてボロボロの爪の先で。

千切り、解体し、そして、見つけだす。

『心臓を……』

…何故、そう思うか？

それは一昨日だ。

くだらない話をしながら放課後を過ごしていた時に、俺はすっかりその話を聞いてしまった。

暁子は…無駄にお喋りなああの馬鹿な女子生徒は、大げさな身振り手振りでそれを語って見せた。

『昨日の夜、アタシ忘れ物しちゃった事に気付いたの。あ、何を忘れたかは聞かないでよ？ちょっとヤバイ物だからサ……』

あの暁子の事だ。

大方、恋人といちゃつきでもしてピルケースを落としたとか、そんな所だろう。

『でさ、その時階段に……座ってたの。…アイツが』

俺は身震いする。

その『アイツ』が今俺の目の前に座っているのだ。

『今でも見間違いないじゃないかって、悪い夢だったんじゃないかって、思うけど……でも、違うの』

『生臭い錆びた鉄のような匂いがしたの。真っ白な、プラスチックみたいな塊がいったい転がってて………』

…暁子は口籠もる。

俺達（俺の他にも複数人のクラスメイトが居た）は顔面蒼白の暁子を見て、大いに面白がり、からかった。

どうせいつもの冗談だろう、どうせ何かと見間違えたんだろう、としかし、いつもなら膨れて殴り掛かって来るか、笑って冗談だとバラしてみせる筈の当の本人の表情は、一向に曇ったままだった。

その重苦しい空気に、俺達は一斉に押し黙る。

『その………ね、信じてくれる？』

暁子は言葉を覚えたての幼児のようなたどしい口調で、続きを話す。

『本当に最初は何かの間違いだと思ったの。でも……………あれは絶対に腕だった！小さな子供の腕！だって、ねえ信じられる？私のね……………私の……………目の前で……………』

『食べてたのよ……………』

「……………」

そいつは女子の癖に股を大きく広げ、立て膝をついて床に座り込んでいた。

俺の呼び掛けなど最初から聞こえていないとばかりに、微動だにしていなかった。

「おいってば！」

俺は少し苛立ちを籠めた声で、もう一度そいつに呼び掛けた。

そいつを上から見下ろすと、必然的に長い紺色のスカートから覗く太股が嫌でも目に付いて、ばつが悪いという事もあった。

（こいつ、人よりスカート長くしてる癖に、わざとやってんのか？）俺はあからさまに眉をひそめ、そいつから目を逸す。

見たくないものを見たというよりは、見てはいけないものを見てしまった、罪悪感からだった。

あの話が本当だとすれば、俺は化け物の太股を見て喜んでる事になってしまうからだ。

「なに」

そいつは恥じらう訳でも俺の方を向く訳でも無く、たった二文字だけの手抜きの返事を投げてよこした。

だが、俺にとっては会話が成り立つだけでも万々歳だ。

とにかく、一刻も早くこいつの傍を離れたい。

「何って、そりやお前……………」

俺は半ば呆れながら改めてそいつの格好をしげしげと見つめた。

不幸にも、俺は風紀委員だ。

本来ならば一番楽な委員の筈だった（だから進んで立候補したのだ）。

何故なら校則を守らない生徒は、この学園には殆どと言って良い程にいない。

犯罪を起こすに至る、極めて危険な意識の除去を人一倍施された人間の集まり。

それが名門

「聖ペルレ学園」だ。

つまり、大抵注意するように上から言われるのは、いわゆる『常習犯』という奴で…。

必然的に『こいつ』に注意する羽目になる、という訳だ。

「……お前さ、俺が何でお前に話し掛けてるか、自分で考えてみて分からないか？」

…そうだとしたらこいつは末期的だな、と思う。

だらりと足の爪先まで垂れ下がり、いつも床に引き摺って歩いているせいで裾が擦り切れたスカート。

ブラウスの上三つのボタンは千切れて無くなっており、ほつれた糸がとび出している。

おまけに、こいつはソックスも上履きも履かない。

つまり、にわかには信じがたいが、常時素足で過ごしている…ということだ。

「なに？またお説教？」

そいつは上目遣いに俺を見つめ、面倒臭そうに言った。

上から見下ろしている所為で、そいつの隈がくつきりと目の下瞼のラインを縁取っているのがよく見える。

俺はあまりに変わり映えのしないそいつの態度に大きく溜め息をつく。

こいつは前もこんな舐めた態度で俺をイラつかせた…気がする。詳細は全く思い出せないが、不愉快な感情だけは鮮明に海馬にインプットされていた。

そしてそんな俺を見て、そいつはにやりと嫌らしい笑いを浮かべる。その笑みはまるで気が違ったピエロのような、可笑しみと不気味さが混濁され一体化していく微笑だった。

「それとも…」

…そいつは音程を嫌に低くし、まとわりつくようなねっとりとした声色で、俺を絡め取るように赤い唇を震わせた。

俺は口元まで出かかった文句を、思わず飲み込んでしまう。

一昨日の、話を聞いた時の恐怖を思い出した。

『あいつ、心臓を…私の前で心臓を！確かに見たの！でも、さっきまで忘れてた……。あんな鮮烈な光景を忘れてたのよ……。！』

暁子の顔色は見たことの無い程に白く染まり切っていた。

実際、何故『こいつがやったのだ』と俺達が認識出来ているのかも、実は全く解らない。

こいつは確かに目の前に居て、けれど…こいつはそこには居ない。存在を知覚していても、詳細までは思い出せない。

「私が…心臓を食ったって話？」

そいつは俺の反応を伺うようにして、顔を覗き込んで来た。鼓動が早まる。

狙われた心臓が、怯えるように跳ね上がっていた。

気付いている？

それとも、誰かが言いふらしたのか……。

「……………廊下に座るのは、校則違反だ」

少しばかり、声が震えた。

気取られただろうか？

この少しの不安と恐怖を、悟られただろうか？

俺は少し心配になる。

毅然とした態度を保って、恐怖を振り払いたかった。

「…私が怖い？」

そいつはさっきとはうって変わって、今度は猫を撫でるようなおっとりとした優しい声を出してきた。

こいつは何とも言い難い曖昧な雰囲気を持つ女だったが、これだけはハッキリとしている。

「…………ふざけるな」

…それは、血が似合う事だ。

ホラー映画に出てくるどんな猟奇殺人鬼よりも、べったりと赤黒い、生乾きの血が、こいつには異様に似合っている。

「ねえ、私が怖いんでしょう？」

そいつは繰り返した。

その気の弱そうな草食動物のような瞳に、凶悪な…歪んだ真珠のような光が揺らめいていた。

「…ああ、怖いよ。死ぬ程怖い。これで満足か？」

俺は怖気づきながらも、不機嫌にそう答えた。

すると、そいつは満足気に口の両端を釣り上げて笑う。

俺はその口角がそいつの後頭部まで裂けて開いて行くのではないかと、そんなくだらない妄想にとり憑かれる。

「委員長さんは見かけによらず怖がりなのね…」

ゆっくりと、諭すような見下した口調で、そいつは俺の脛をそっと撫でる。

俺の頭蓋骨まで見透かしているかのような尊大な態度は、年配の大人が生きる事とは何たるかを、愚かしい若者に教えてやろうという様にそっくりだった。

つまり所、あの校長の奴によく似た話し方だったという事だ。

「馬鹿にしているのか…？」

俺はたった今苦虫を噛み潰したかのように呻く。

正直…馬鹿にされるのは慣れていなかった。

成績優秀。

スポーツ万能。

俺は周囲から比較的持て囃されて生きてきた。

それなのに、こんな底辺に近い奴に馬鹿にされるのは我慢ならなかった。

校則破りの常習犯。

成績は…確か調書によればいつも下の下も良い所だったはずだ。

かと言って何か秀でている所がある訳でもない。

おまけに、容姿もイマイチ。

…こいつはそんな女だ。

何故俺はこんな女に怯えているのか？

そう思うと、途端に腹が立って来た。

「あら、今更気付いたの？私は生まれた時からあなたを小馬鹿にして生きてるのよ？」

そいつは元々の下がり眉を更に下げると、忘れるなんてひどい人ね、と悲しそうな声を演じて見せる。

…我慢ならなかった。

「いい加減にしたらどうなんだ！これで何度目の注意になる！？」

俺は思わず声を荒げる。

そうだ。

俺は校長…実質は教団の下っ端の幹部役のような下らない奴に頭を下げている。

全てこいつのせいだ。

こいつが校則に背くお陰で俺はあの薄汚れた禿げ親父に向かって何度も頭を垂れるのだ。

教団の中間管理職にやあロクな奴がいねえとその垂れた頭の中で毒づきながら。

口では心底反省しているような振りをして。

「怒られるのはいつも俺だ！お前のせいで、俺の品性までもが疑われるんだぞ！」

俺はコンクリートの冷たい壁に、固く握った拳を力任せに叩きつける。

小指の腹からビリビリと電気のような痛みが腕を伝って登ってくる。掛けていた眼鏡がずれ、そいつの顔がぼやけて歪んだ。前々からガツンと言ってやるべきだったのだ。

こいつの異様な雰囲気や噂に惑わされ、今までずっと生温い注意で済ましてきたのがそもそも間違いだったんだ。

…間違いなんてあってはいけない筈なんだ。

この世界に、間違いなんて、あってはいけない事なんだ。それなのに、こいつは……

「……………」

そいつはただ俺が怒りを吐き出す様を黙って見ていた。眼鏡がずり落ちている所為で、表情は見えない。

俺は眼鏡を上げようと、こめかみに手を伸ばした。

「…バツカみたい」

そいつの興味の無さそうな乾いた声が、何故か背後から聞こえて来た。

…瞬間、俺はその場に凍り付く。
眼鏡が無い。

ついさっきまで鼻先に乗っていた黒縁の眼鏡が、姿を消していた。俺は慌てて下を向くが、そこには無機質な質感の廊下がぼやけて映るだけだ。

「お探しのモノはこれ？」

俺の肩に酷く冷たいものが置かれる。

俺は思わずそれを振り払おうと身を振るが、身体は何故か錆付いたように動かなかった。

「心配しないで」

嘲笑を含んだ単調な調子の声が耳元で聞こえると同時に、背中にふたつの柔らかいものが当たる。

その時、俺は初めてそいつの身体が俺の背中に接近しているのだと

いう事に気付いた。

「私、末端冷え症なの。最近の学校って、冷房効きすぎよね…」

「……………」

俺は背後から迫ってくる薄ら寒さに息を飲んだ。頭が上手く回らない。

色々な情報がごちゃ混ぜになって、俺の脳内を駆け回っている。

そいつの右手は俺の肩を女子とは思えない恐ろしい程の握力でガツチリと掴み上げ、俺とそいつの身体をピッタリと密着させる。

もう片方の手は俺の眼前でプラプラと眼鏡を指先に引っ掛けて、猫を玩具でからかうように揺らしていた。

『この華奢で不健康そうな身体の何処にそんな力が有るのか？』

確かに、それも気になった。

しかし、俺にはそれよりも遥かに気になる事が有った。

「……………どうやって……………移動した？」

その言葉が声になったかどうか、俺には分からない。

それ程に俺は動揺していたし、焦り切っていた。

こいつは確かついさっきまで、俺の目の前でだらしなく股を広げて座り込んでいた筈だった。

しかし、今現在こいつは一瞬にして俺の背後に居る。

音も立てず、気配も移さず。

しかも…俺の掛けていた眼鏡を、一瞬の内に奪って。

「ふふふつ……………知ってたーい？」

そいつは相変わらず、からかうように俺の眼鏡を指先で遊ばせると、それをゆっくりと俺の鼻先に戻した。

クリアになった視界に、そいつの白い手が映し出される。

「でも、まだ秘密なの。ゴメンなさいね」

無邪気そうにそいつは言う。

そして、その言葉が耳に届くと同時に、俺のもう片方の肩に冷たい感触が走った。

（また手を置きやがった…！）

俺はさすがに抗議のひとつもしてやろうと素早く左を向いたが、すぐにその気概を挫かれてしまった。

俺の顔の直ぐ横に、そいつの凍り付くような不気味な笑顔が有ったからだ。

俺は、思わず小さく悲鳴を上げて前のめりによるけ、跳ぶ。

心無しかそいつの口の端に、赤黒い血が付いているように見えた。

「…存外怖がりな人ね。プライドと学歴コンプレックスの塊みたいな人だとは思ってたけど…」

そいつはクスクスと嘲笑うと、俺の肩から手を離し、立ち尽くす俺の横をすり抜けて行く。

通り過ぎる瞬間、そいつは言い忘れたとばかりに俺の耳元に口を寄せ、驚く程に冷たい息と言葉を吐いた。

「あなたはまるで腐った魚みたいな人間だから、その内に反吐を吐く事になると思うの」

「それこそ…波打ち際でうなだれる、年老いた人魚みたいにね…」
そいつが通り過ぎた瞬間、金縛りから解けるように、俺の身体はその場に崩れ折れた。

俺は頭を抱えていた。

…どうも、おかしい。

あの話を聞いた所為なのか、それとも俺がおかしくなったのかは分からない。

だが、確実に何かがおかしくなっているのだ。

特におかしいのは、この学園は神の真珠を崇め守護するあのお偉い教団の支援によって成り立っている。

つまりそれは、俺を含む特別重度な患者ばかりがこの学園内に密集しているという事でもある。

そんな奴らにとって、校則に背くなんて事は、万死に値する行為な

のではないか？

…それじゃあ、どうしてあいつは校則に背く事ができる？

それに、あの超常的な力…。

どれだけ神の真珠と接触しようが、あんな力を得られた前例は無い。それに、そんなに長い間接触していたのなら、あいつの自我は制御されて消えてしまう。

「どういう事だ…？」

俺は額に浮かぶ汗を拭う為に、手をそつと頭から離す。

…その時、ふと腕の注射針の跡に目が行った。

「あいつの数値は、いくつなんだ…？」

数値…それは神の真珠に触れる事によって発症する病…：天使症候群の感染値だ。

毎年入学してきた者には必ず検査が施され、生徒はその数値によってクラス分けされている。

俺は、千五百ぴったりだった。

一般市民であるなら標準値はせいぜい五百から六百といった所だが、俺達は違う。

俺達はいずれ教団を継ぐ存在だ。

その分、神の真珠にも長く触れている。

故に一般人よりもその感染値は高く出る筈なのだ。

「とにかく、あいつは前々からおかしな行動が目立ち過ぎる。それなのに、上は何故動かないんだ…」

そう、確かこれだけじゃなかった筈だ。

あいつの起こした騒ぎは、まだ沢山有る。

有る…筈なんだ。

しかし…：思い出せない。

今回の件だけで言えば、あいつは殺人すら犯していそうなものだ。しかも噂によれば、その殺した子供の死体を解体して、心臓を食っていたという話じゃないか。

こういう異常な殺し方をする奴は、必ず何回も罪を犯し、犯曆を重

ねているものだ。

「確かに過去にも何かがあった…」

しかし、幾ら俺が頭を捻ろうとも、浮かんでくるものは鈍痛ばかりだった。

そういえば……あいつの名前は何だった？

おかしい話だが、これまであいつを何回も注意しているにも関わらず、あいつの詳細が一切思い出せなかった。

それどころか、あいつの事を考えれば考える程に、頭痛は酷くなっていく。

「なんなんだ……これは…」

まるで思い出す事を制御されているようだった。

俺達が産まれた時に植え付けられた、あのプログラムによって…。

（俺は解放されたいのか…？）

まさか、そんな事は無いと思った。

俺達人類はあれが有るからこそ、何世紀もの間繰り返して来た愚かしい罪を清算できたのだから。

とにかく今は、あいつの事を調べなければ…。

俺は痛む頭を抱え、思考を巡らせる。

「調書が、有るはずだ」俺達は言い方を悪くすれば、いずれは教団の駒となる存在だ。

都合の悪い事が有れば、その部分はあらかじめ削除しておかなければならない。

その為、生徒ひとりひとりを丁寧にチェックし、こと細かに書き付けておく調書がある。

そして、それは職員室の奥にある鉄製の不気味な扉…。

いつもは厳重に錠錠されており、簡単には入る事は出来ない部屋の中にある。

しかし、一週間に一度、あの部屋に入り込むチャンスがある。

校長は週末…大抵は土曜だが、教団の会議に出席していて、不在の日がある。

その日に俺が

校長室から鍵を……

（俺は……なにを考えている？）

俺は、俺の中の何かが綻んで行くのを感じた。

（これは、校則違反だ）

きつちりと編み上げられた毛系のマフラーを、端からほどいていくように……

（やっている事は、数値の低いあの暁子（馬鹿女）と同じなんだぞ……？）

暁子は美しいが、馬鹿で尻軽だ。

同じくその恋人も、低数値の不良。

夜の校舎でいちやつくなという校則は無いが、己の欲望を制御出来ないのは愚かな者のする事だ。

（それと同程度の事を、俺が……？）

馬鹿馬鹿しい。

風紀委員は一年に一回、必ず調書が見られるという決まりではないか。

（その時に確認すれば良いだけの………）

………

『本当にそれで良いのか？』

俺の声がした。

全く知らない俺の声。

『一年に一回？それまで待ってるってのか？…阿呆らしい！』

その声は俺の頭の中で反響し、ガンガンと頭蓋骨の内壁に痛みを打ち付けてくる。

『おまえはいつもいつも、ペコペコペコペコ、頭を下げてばかりじゃないか。そうまでして出世したいか？そうまでしてプライドを保ちたいか？』

違う…これは俺じゃない。

俺は母さんと父さんの期待に添うように動いているだけだ…。

エリートになれば、大人になった時に楽に……

『また、親のせいかな？』

うんざりしたような、呆れたような、そんな声。
やめろ、やめてくれ……

俺は、ただ規則を……

『学歴・出世・金・女・安定した家庭……何が楽しい？何がそんなにおまえを駆り立てる？』

ち、が、う、俺……は……

『吐いてしまえよ』

………弾けとぶ。

俺の綻びから癒しが入り込んで来る。

「ああ……俺は……」

虚ろな空。

赤い、赤い奴ら。

それがただ、そろそろと列をなして……。

その日、俺は魚を吐いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3497c/>

歪

2010年12月10日02時10分発行